



のぞみ 希 望

学校ホームページアドレス <http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/sugita/> TEL771-0649



互いにささえあいながら

学校長 村上 裕子

4年生の教室のベランダに、ツルレイシのグリーンカーテンが育っています。今年の夏休みは、連日の猛暑と時折の豪雨に悩まされた感がありました。皆様はいかがお過ごしでしたか。41日間の夏休みが終わり、今日から学校が始まります。夏休み中に大きな事故やけがもなく、元気にスタートをきることができたことを職員一同心から嬉しく思っております。

夏休みは、リオオリンピックに釘付けになられた方も多かったのではないのでしょうか。本校の卒業生の松永大介選手が出場した「20キロ競歩」では、ご本人の努力の成果と皆様の声援が届いたかのように、7位入賞、日本人三選手の中では最高位でゴールすることができました。日付が変わるころから、杉田劇場ではパブリックビューイングが行われていました。私も地域の皆様と一緒に大きな画面を食い入るように見させていただきました。集まった皆様の熱気と松永選手のレース運びに大興奮していたら朝になっていました。

レースの合間には、競歩という競技の解説や松永選手の紹介がありました。競歩の歩型は、「どちらかの足が必ず地面に接していること」「前脚は接地の瞬間から地面と垂直になるまで膝を伸ばすこと」という定義が定められています。競技中の歩型を審判員が見ていて違反だと判断したときには赤色のカードが発行され、それが累積3枚になるとレース途中でも失格になります。たとえ上位でゴールしてもその後失格になるケースもあるそうです。だから、どんなに疲れても歩型をくずさず高速で歩き続けることがどれほど過酷なのかがわかりました。さらに、浜中学校や横浜高校の恩師、同窓生等多くの皆様から松永選手が今に至るまでいかに努力されたかのお話を伺うこともできました。改めて、この競技にかけている松永選手の思いにふれたように感じました。

リオオリンピックでは史上最多41個のメダルを獲得しました。体操、卓球、競泳、陸上など個人が自分のもっている力を出しきって演技やレースをした結果、チームとしてメダルを獲得した競技がありました。自分だけでなく、チームが一つになって団結していく姿には、個々の力以上の大きな力が加わっているようでした。卓球の伊藤美誠選手のインタビューでの「先輩を手ぶらでは帰せません。」という一言は、弱冠15歳ながらも自分だけではないというチームの絆の強さが伝わりました。人と人とかかわりながら、このような信頼感をもてることはすばらしいです。さらに、それぞれの選手が口々に家族やスタッフ、ここまで支えてくれた周囲の人たちへの感謝の気持ちを語っているのを聞き、胸が熱くなってきました。苦しい練習をがんばったのは自分なのに、それを支えた周囲の人に心から感謝する気持ち。これが競技を続ける原動力になるのかもしれない。

学校でも、子どもたちの支えあう姿を見ることができました。区水泳大会では、互いに応援しあいながら、自己ベストの記録を更新した子がたくさんいました。地域のイベントでは、MDS金管バンドやハーモニーズも心をつなげて美しい音色を響かせました。一人ではくじけそうになることでも、誰かに支えられると力がわいてきます。自分のことをわかってくれる友達がいるのはいいものです。これからもあたたかい人と人とかかわりがもてるような活動を工夫していきたいと思っています。今後も子どもたちの成長を見守ってください。何かありましたら一緒に考えていただきましたら幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。